

編集後記

喜ばしいニュースです。今年2月うららかに晴れた広島で、久しぶりに本学会の研究発表会が開催されました。前回は2007年11月でしたので、実に12年ぶりです。参加者十名ほどのこじんまりとした集まりでしたが、北海道、東京、京都、大阪からもお越しいただき、旧知の方、初めての方が交流を深めました。現代ギリシャの言語や文学を紹介されてきた先輩方の訃報を聞くことが多い中で、ささやかながらも継続していこうという会員の方々の熱意を感じられたのは心強いことでした。

台湾の勤務先の大学図書館に東千尋氏の『現代ギリシア詩集』や茂木政敏・中井久夫両氏訳、ロバート・リデル『カヴァフィス詩と生涯』などを入れてもらいました。日本語学習者人口では世界第5位の台湾。日本文化が好きで学習を始める学生が多いのですが、日本語を通じて広い世界にも目を向けてくれればと願っています。

ちなみにギリシャの日本語学習者は(公式統計では)500人にも満たず、世界137国中第68位。西欧内では少ない方から数えて第6位、人口半分のアイルランドやノルウェーよりも少数で、ちょっと悲しい。もっと増えて欲しいです。(橘)

ふ たたび韓国文学の話題。両国の中の扱えないわだかまりが日々、メディアを賑わせていますが文化的な交流を妨げるものではありません。むしろ文学に関していえば、作品の翻訳をとおした交流はますます盛んになり、書店で「韓流文学コーナー」を見かけることも珍しいことではなくなりつつあります。

韓国文学の翻訳者がよく口にするのは英語と同じように韓国語は相手を罵倒する言葉がひじょうに「豊か」で、日本語に訳出するときに立ち塞がる壁になるということです。日本語に該当する語彙がないことが多く、訳語があったとしても使用をためらう場合があるからです。翻訳に関わったことがある人ならば同じように「困った」経験があるのではないのでしょうか。

幸いなことに二月に開かれた研究発表会のあと「総会」が開かれ本誌に掲載される文章(とくに翻訳)における差別語・表現の使用について率直かつ貴重な意見が出されました。文責の所在と編集委員の関与については本号の学会報告と学会会則をご覧ください。そしてこの件について何かご意見がありましたらぜひ編集委員までご連絡ください。(佐藤)